

月の花挽歌 ～9. 日日平安～^{にちにち}

9-6

それぞれの思惑が錯綜している席に、一見してバーテンダーと分かる恰好をした菜々緒がやってくると、顔なじみだったせいかなTは彼女が名乗るのも待たないで、飲み物の中身について一方的に話すと真紀の飲みかけのシャンパングラスを渡した。

「急かせて悪いが、一口飲んでみてよ」とTは声高に言った。

微苦笑を浮かべた菜々緒は、事の次第を理解したのか、「奥深い味わいです。似たようなカクテルはありますが、こんなに贅沢な材料は使いません」と的確な感想を伝えた。

「材料か - -、そうに違いないが、材料選びも大事だからね」とTはハイな気分が萎んでいく中で負け惜しみを言ってから、「折角だからカクテルのネーミングをつけてくれないかな。お願いするよ」と菜々緒に言った。

「お客様がつけてください」と菜々緒は頬を膨らませてTに答えた。

「カクテル名ですが、(紙風船)では変でしょうか？」と菜々緒の困った様子を見かねた真紀は、ふと思いついた名前を言って、彼女が持ち場へ戻るきっかけを作った。

「ピッタリな名前ね。紙風船にしちゃいなさいな」とKは特徴的な口角を挙げて言った。

「いいね！紙風船とはグッドネーミングだ」とTは何か急に立てられるようにして高言を吐いた。

「紙風船はフランス語でバロン・アン・パピエと言うの。日本語、フランス語どちらにしましょうか」とKはネイティブのような仏語を交えて訊いた。

「当然、日本語でしょう！話は逸れますが、さっき迄ここにいたバーテンダーの菜々緒さんに向かって気障なセリフを吐いた輩がいるんですよ」と横田は割り込んできた上に筋が通らないことを口走って、ぎくしゃく感を引き起こした。

「その話、私が買います！」と脱ぎっぷりのいい女優は、横田の言動を制する真紀に逆らうようにして姉御口調で言った。

「絵描きさん、続けて、続けて」と話の腰を折られたTは、ほうれい線を深めて無表情に言った。

「ありがとうございます。輩というのは私が世話になっている画商のことです、常識人を絵に描いたような男なのですが、その時ばかりはタガが外れたのでしょうかね、菜々緒さんに“君の瞳に乾杯、などとホザクのですから」と横田は画家然として語りながらも、自分もタガが外れていると酩酊状態でも感じていた。